

生存科学研究ニュース

Vol. 41, No.1 2026 年 4 月発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp https://seizon.umin.jp

「共存」の再構築へ

理事 大林雅之



「生存科学研究ニュース」本号は、本年 1 月に行われた生存科学シンポジウムの特集号である。詳しくは、その記事を読んでいただくことがまず大事であるが、巻頭言を書かせていただくにあたって、僭越ではあるが、生命倫理学を専攻する筆者の視点から、本シンポジウムから筆者が受け止めた課題について述べさせていただく。

昨年秋、連日のニュース報道でにわかに「野生動物問題」が日本社会全体にクローズアップされ、そのような背景とは別に先行して企画された本シンポジウムではあったが、時期的に大変変遷に富むものとなった。

本シンポジウムのテーマである「野生動物との共存」は、環境問題や野生動物管理の課題を扱うものでありながら、その実質は、「共存」という言葉の内実を問い直す思想的契機を含んでいた。とりわけ、「保護」と「管理」という一見対立的な概念が、現実の制度運用においてどのように接続され、さらには規制の技術として機能しているのかという点が重要であった。

現代日本における野生動物問題は、シカやクマの増加といった生態学的事実に還元されるものではなく、むしろ人口減少や地域社会の空洞化といった人間社会の構造の変化と密接に絡み合いながら、人間と自然の境界そのものを揺るがすものである。いわゆる「アーバンベア」に象徴される現象は、もはや自然と都市の分離を前提とした従来の枠組みが機能しなくなっていることを示している。

このような状況の中で、「共存」という語はしばしば規範的スローガンとして用いられるが、本シンポジウ

ムでは、その安易な使用に対して根本的な問いが投げかけられていた。「共存」とは何を意味するのか。それは単なる調和や棲み分けを指すのか、それとも不可避的な衝突とリスクを前提とした関係性の再編成を意味するのか。これらの問いは、人間の生存を他の生物との関係の中でどのように位置づけるかという、より深い人間学的問題へと接続していくのである。

さらに重要な論点は、野生動物をめぐる政策や実践がしばしば PDCA サイクルに代表されるような管理技術の枠組みの中で理解されてきた点である。計画(Plan)、実行(Do)、評価(Check)、改善(Act)という循環は、一見すると合理的かつ中立的な手法であるが、何を「問題」とし、何を「改善」とみなすのかという価値判断が不可避的に介在していると考えられる。すなわち、野生動物の存在は「リスク」として把握され、その管理が正当化される構造がすでに前提化されているのではないだろうか。この点において、「保護」と「管理」の対立は見かけ上のものであり、実際には同一の規制の構造の内部に位置づけられている可能性がある。保護はしばしば管理の一形態として制度化され、逆に管理は倫理的配慮を伴うことで正当性を獲得する。この相互浸透の構造を見抜かない限り、「共存」は単なる理念にとどまり、現実の制度や実践を批判的に捉えることはできないであろう。

したがって本シンポジウムの意義は、もとより野生動物問題に関する知識の提供にあるのではなく、それらを支える思考の枠組みそのものを可視化する点にあったと言えよう。すなわち、人間中心主義がどのように制度化され、リスク管理や政策形成の中に組み込まれているのかを問い直す契機となることを示したのではないだろうか。

このように考えると、「共存」とはもはや与えられた目標ではなく、不断に問い返されるべき問題となり、人間と野生動物の関係のみならず、人間社会のあり方そのものの再構築を迫る実践的かつ倫理的課題となったと言えよう。

(東洋英和女学院大学名誉教授)

第11回生存科学シンポジウム「野生動物との共存」

座長 理事長 松下正明

本年1月10日、第11回生存科学シンポジウム「野生動物との共存」が、オンラインで開催されました。

生存科学研究所にとって、総合的に人類の生存問題に取り組むにあたって、人類以外の諸生物、とくに哺乳類動物との生存・共存について論じなければならないという理念が必要であると考えています。人間の生存の権利は、それらの動物の生存の権利を無視・拒否して一方的に成り立つわけではないからです。そのような基本的な考えのもと、今回の生存科学シンポジウムでは、「野生動物との共存」というテーマを取り上げました。

テーマの専門性もあって、シンポジウムの企画にあたって、環境倫理学を専門とされている東京大学名誉教授の鬼頭秀一先生にご相談し、野生動物についての日本での専門家である以下の先生方のお話をうかがうことにしました。なお、司会は、理事長の私と、鬼頭先生が務めることにいたしました。

第1席は、基調講演の意味もあって、鬼頭秀一先生に、「環境倫理から見た「保護」と「管理」の狭間—野生動物と人間との距離感を歴史的に捉え返す」というタイトルで講演をお願いしました。



鬼頭秀一先生

先生は、「(積極的)駆除」と「保護」の二項対立図式の歴史的変遷を北海道のヒグマを事例として述べ、その二項対立図式を乗り越えるために、アメリカの実状を呈示しながら、「保護」から「管理」へ、人間と自然の関係論に根ざした環境倫理の構築が必要であることを訴えられました。また、野生動物と付き合うためには、野生動物と人間は、ある意味では対等であり、人間が畏敬の念を持つことはあるが、それはいのちの対峙であり、お互いに「脅威」でもある存在であることを前提として、「野生」を「関係的価値」の中で捉え直す必要があり、その捉え直しは、今まで伝統的に「野生」と付き合いしてきた先住民族のアイヌの人たちや、山村で狩猟を中心的な生業として生きてきたマタギの人たちの「野生」に向き合う知恵を再評価し、それを現代的な形で組み替えていく必要があると主張されました。本シンポジウムの基調となるお話でした。

第2席は、東京農工大学名誉教授の梶光一先生から



梶 光一先生

「野生動物管理学からみた大型獣の生息状況と課題—特にシカについて」の講演をいただきました。

講演では野生動物の増えすぎが主要なテーマ

で、それによって人間の生命や生活を脅かし、野生動物自体も健康な状態で生存できなくなり、さらに土壌侵食などの生態系の機能不全が引き起こされたりしていることが指摘されました。また、日本の森林は300年にわたる荒廃から、最近の40~50年間で劇的に回復し、人工林への転換も増加する一方、耕作放棄地が増えてきたことが示されました。シカの増加により、林業被害、森林被害、列車事故、交通事故が急増しており、今後は、森林再生が可能な個体数水準まで密度を低下させる仕組みを構築する必要があることが強調されました。

第3席は、兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授の横山真弓先生による

「増加力を取り戻したツキノワグマの保全管理の現状と課題—新たな体制構築の必要性」の講演



で、先生は、2023年・2025 横山真弓先生

年、東日本ではクマが多数出没し、その原因として、春から夏にかけて出没が増えていること、人為的環境周辺での定着個体の増加、人馴れ個体(アーバンベア)の増加、秋以降、ブナ科堅果類(ドングリ)等の同時凶作があったことが指摘されています。その結果、クマの捕獲数が増えています、被害は減らないのは、都道府県による特定鳥獣保護管理計画が策定されているものの、実行体制がほとんどなく、国は責任を負わない仕組みになっていると指摘されました。これからの問題として、兵庫県におけるクマ出没の事例を紹介しながら、野生動物管理の基本を具体的に指示されました。

第4席は、横浜国立大学名誉教授 松田裕之先生に



松田裕之先生

による「野生鳥獣に負け始めた日本—人と野生動物の利用しあい、恐れあう関係」の講演でした。先生は、北海道の札幌市街地、知床、渡島半島でのヒグマ出没と人

間や農業への被害の状況を示し、どうやってクマを管理するか、問題個体(悪いクマ)の管理、能動的順応的管理、管理戦略評価などの具体的対策について詳しく語られました。野生鳥獣を絶滅危惧に追いやった時代とは異なる価値観と社会制度が必要であること、人とクマは互いに恐れてこそ共存できること、一方、人とクマは友人としては共存できない、互いに用心し合うことで初めて共存できるという先生の見解が述べられました。



パネルディスカッション

上述したことは、シンポジウムでの講演の要点を筆者なりにまとめたものですが、「野生動物との共存」という問題意識のもと、野生動物に関わる4人の専門家が語られた内容は、人間の総合的生存学を目指している私たちにとって極めて教えられることが多いものでした。また、今回のオンライン開催で、多数の人たちが視聴者となられたと聞いております。

なお、シンポジウムでの講演録は、フルペーパーとして、後日、私どもの研究所の機関誌「生存科学」に、掲載される予定です。

(東京大学名誉教授)

自主研究「過疎地と都市部における 高齢者の心理・比較研究」

研究責任者 榊蔵美智子

私たちは、岡田憲夫(関西学院大学災害復興制度研究所顧問兼研究員、熊本大学客員教授くまもと水循環減災システム研究教育センター、京都大学名誉教授)、町澤理子(国立国際医療研究センター国府台病院心療内科、医師)、北山純(学習院大学文学部教授、臨床心理士、老年期心理学)、栗本美百合(大阪府スクールカウンセラーほか、臨床心理士、アートセラピー)、藤原成一(故人、生存科学研究所常任理事)、榊蔵美智子・研究会責任者(ぽこあぼこ分析オフィス・金沢大学保健管理センターほか、臨床心理士、ユング心理学)というメンバーで2023年度から

3年間に渡って、自主研究を実施してきました。

研究目的としては、以下のことを掲げました。

＊高齢者にとってどのような場所、関係性、時間が心理的安定につながっているのかについてまとめていく。

＊場所については、土地の持つ歴史や風土と高齢者とのつながり、そしてコミュニティスペースについて調べていく。関係性については、家族・近隣との関係・住居地域とのつながりに焦点をあてて調査していく。時間については、現在どのように生活時間をつかい、過去をどのようにとらえているか、そして病気や死の不安や悲哀の感情を、どのようにのりこえようとしているのかなど追究していく。

＊総じて、地方と都市部での比較をしながら、それぞれの地にみられる工夫や特徴を明らかにしていく。

具体的には、ある程度健康な高齢者を対象に、その健やかさを支えているものはどんな点なのかを念頭において、過疎地と都市部での調査研究を進めていきました。メンバーのこれまでの研究実績や背景をいかして、メンバー間での話し合いを紡いでいきました。

研究内容を以下、簡略にご紹介します。



智頭の森のミニデイ活動の様子

岡田憲夫氏は、鳥取県智頭町のまちづくりに関与してきましたが、そうした中で生まれた、高齢者の相互ささえあい「森のミニデイ」や、生まれてから終わりまでの包括支援の場としての「いのちね」について紹介しました。自然に根差した地域での生活というだけでなく、自治の精神が生きている町での高齢者支援は、相互の関係性、食、運動、歌など熟考された内容で実施されてきており、学ぶべきものが多くありました。

北山純氏は、東京でのインタビュー調査を実施。対象者が70歳前後だったこともあり、高齢者ならではの思考が明瞭になったわけではありませんでしたが、老いのプロセスの中であって、少しずつの変化

を受け容れ、適応しようとする、ささやかな変容の物語が、インタビュー内容でみうけられました。

栗本美百合氏は、アートセラピーの経験から、高齢者向けの素材提案や、ものづくりがもたらす意味について考察。日常と非日常を行き来することで得られる喜びやこころの成熟、人生全体の意味を包括して感じられるようなものづくりの意義を見出していきました。

町澤理子氏は、心療内科医としての経験から、創造的適応を促す「豊かな孤独の可能性」や孤独な時間をもつ、肯定的な意味合いに着目し、高齢者のこころの健康について言述しました。

榊蔵は、智頭、京都、珠洲にてインタビューやものづくり(無地のうちわでのコラージュ)をすすめる中で、健やかな生活を送る高齢者を支える、ほどよい関係性、家族の見守り、過去の仕事の誇り、現在の趣味の様子などに着目。都市部の多様な支援と多様に選択できる趣味、一方で自分から求めていかないと孤立してしまうことの危険性、地域に生きる人々の自然と共生する生活や顔の見える関係性の特徴に着目していきました。

上記、研究内容の詳細については、学術誌「生存科学」に掲載予定ですので、ご覧いただけますと幸いです。



うちわ作りの様子

調査において、ものづくりに参加していただき、率直に老いについて、ご自身のお気持ちを話してくださった高齢者のみなさまに深謝申し上げます。また、分野を越えての自由な研究を支えてくださった、故藤原成一先生、生存科学研究所の理事のみなさま、事務局のみなさまに深謝申し上げます。

2026 年度 事業計画

事業方針に則り、2026(令和 8)年度においても、公益財団設立当初の掲げた 4 事業、自主研究事業、助成研究事業、シンポジウムの開催等の事業、学術誌「生存科学」等出版事業およびニュース発行などの事業内容を実施します。

自主研究事業(一般部門)は 9 件、自主研究事業(若手研究者部門)は 2 件、研究助成事業は 18 件を採択いたしました。

当研究所の組織の形態に基づき、各事業等の進捗状況、運営状況についての動向を常に確認し、相互に連携しつつ、当研究所の理念である「生存の理法」を確立するとともに、社会貢献活動への取組みを推進していきます。

事業計画の詳細については、[公益財団法人生存科学研究所ホームページ](#)に掲載いたします。



研究会等日報

- | | |
|-------------|--|
| 2 月 13 日(金) | 幼小接続期のカリキュラム作成についての研究会開催 |
| 2 月 16 日(月) | 幼小接続期の学びのデザインから沖縄県民の健康の維持・増進を考える研究会開催 |
| 2 月 17 日(火) | 里山林の生物多様性保全と自然環境教育研究会開催 |
| 2 月 19 日(木) | 編集委員会開催 |
| 2 月 24 日(火) | 40 年史編纂委員会開催 |
| 3 月 3 日(火) | 幼小接続期のカリキュラム作成についての研究会開催 |
| 3 月 17 日(火) | レジリエントで持続可能な社会に関わる「生存」諸課題のための「超学際研究」開催 |
| 3 月 17 日(火) | 40 年史編纂委員会開催 |
| 3 月 24 日(火) | 理事会開催 |
| 3 月 25 日(水) | 当事者と支援者のウェルビーイングを高めるコミュニティ構築に向けた生存科学開催 |
| 3 月 31 日(火) | 社会的に不利な状況にある人との共生に向けた社会の構築に向けた研究会開催 |